
恋姫無双・光の剣を持つ者

だちけん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双・光の剣を持つ者

【Nコード】

N0528V

【作者名】

だちけん

【あらすじ】

とある大陸に住む元傭兵の鉄月。ひょんなことからいきなり別の大陸に飛ばされてしまった彼は一体どう生きていくのか？

1 話（前書き）

見切り発車の作品ですので矛盾などありましたらゴメンナサイ…

1話

「ここは一体どこだ…？」

その男は薄暗い草原に突っ立っていた。今さっきまで居た場所とは全く違う為に戸惑いを覚える。今まで自分は倉庫に居たはずなのだが？ああ、思い出した。倉庫の隅に埃をかぶった変な銅板を落つことしてから変な光が出てきて…

男がぼんやりしていると背後より5人ほどの気配を感じる。

「ようその兄ちゃん、中々良い物持ってるじゃねえか。そいつを俺達にくれねえかねえ」

そこには薄汚れている服装の男達が、いかにも私は賊ですよといわんばかりの態度で男に話しかける。それぞれの手には剣が握られており、脅しをかける。

この男…ちなみに鉄月と言うのだが、今依頼で店の整理を手伝っていたところであつた為自分の周りには剣が数本、そして柄だけのものが3本ほど転がっていた。男達はそれを目当てに来たのだろう。

「ああ、こいつは人の売り物なんで勝手に売るわけには行かないんだが」

「なに、そいつは問題ねえ。てめえの命で間に合うだろうよ！」

「…（しかたない、か）」

鉄月はおもむろに下に散らばっている柄だけの剣を持つと、男達に対峙する。賊達は笑いながら「こいつは頭が悪いのか？」や「かまわねえ、やっちなえ！」と鉄月を取り囲みながら襲い掛かる。

鉄月はその刹那、柄だけの剣から太陽の光に似た刃を作り出すと腰だめに構える。次の瞬間には周りの5人を全て横一文字になぎ払い、その全てを昏倒させる。

「品物を勝手に使っちゃったなあ。しかし、賊にしては妙に弱いしその前にここがどこなのかも分からん。まいったね、こりゃ」

鉄月が愚痴をこぼしつつ、商品（剣・柄）を背負い・または懐に入れる。薄暗い為に見えにくいが周りを見渡しどこか近くに民家などないかと考えていると、遠い所から土煙が上がっている。どうやらこっちに向かっているようだ。

まさかとは思うが念の為、都合よく背後に雑木林があるためその近くまで移動し、そこで身の丈ほどもある大剣を持ち身を隠す。ようやくその土煙の正体が分かった頃には、騎馬が100も自分が居た場所に展開していた。

「おかしいわね、流星がこのあたりに落ちてきたはず。それにここに賊が倒れていているなんてどういふことかしら？」

「^{カリシ}華琳様、この近くには民家もなく辺りは雑木林ばかり。流星が落ちてから間も無い為周囲を探索すれば先ほど僅かに輝いた光の正体や賊を倒した者の正体も分かるのでは……」

おおう……あの青い服に身を包んだスリットがある女性は何と言う慧眼、しかもあの剣の光を見られていたときたもんだ。どうしようかねえこのまま出て行っても不審者に変わりなく、かと言って逃げても馬で追われたら流石に追いつかれる……静かにこの場を離れて様子を見るか。

しかし自分は気配断ちはそこまでうまくないのが仇となったか、赤い服にスリットを入れている女性に気付かれたようだ。

「華琳様！あそこの雑木林に人影のようなものが見えました！」

「ふうん、もしかしたら目的の人物かもしれないわね。そこに居る者姿を表しなさい！」

金髪である髪はなんと言えはいいのだろうか……凄い髪型の偉いと思われる女性がこちらを向いて軽い殺気を飛ばしてくる。流石に100もの騎馬相手に戦うのは骨が折れるので素直に木の影から出て行く。

「華琳様、こやつが天の御使いとか言われる人物でしょうか？」

「まあ確かにここらでは見かけない出で立ちをしているのは確かね、いきなりで悪いけど貴方は？」

「鉄月てつぎと言います。失礼ですが貴女さまは…？」

流石にこれだけの数を相手にはできない為に一応大人しくしておく。いらぬ誤解を与えるのも面倒だ。

「私は曹孟徳、陳留で刺史をしている者よ」

「失礼ですがそれで、この私に何か御用でしょうか？」

「貴方は私の立場をご存じないのかしら？」

「生憎、ここではない場所に住んでいる為に分かりません」

「陳留で刺史をしている、つまりこの地域を治めている長なの。いきなり得体の知れない人物がこの場所に現れたら警戒するのは当たり前ではなくて？」

「…警戒されている、ということは分かりましたが私にどうしろと？」

「そこに倒れていた賊を倒したのも貴方なんでしょう？その点は感謝するけど不審者には変わらないわ。悪いけど拘束させてもらっわ」

いきなりその地域の長が出てきて、知らない人物だから捕まえる
と来たか…知らない場所だからその点はあるがたいが拘束されるの
は勘弁願いたい。

「貴方様についていくのはかまわないのですが、拘束されるのは勘
弁願いたいのだが…」

「それは却下ね。手荒なまねはするつもりは無いけど、暴れるので
あればそれ相応の扱いになるわ」

「ちなみに今店の品物を持っているが、拘束されるとそれらも没収
されるのだろうか？」

「無論」

「では悪いがその要望には答えられない。私の信用にかかわる為拘
束無しであるなら問題ないが、それができないならばお断りさせて
もらう」

元傭兵である自分として信用に関する一線は絶対に守らねばなら
ない。これは自分の師にも言われていたことである為に尚更である。
僅かに自分が殺気を出していた為か先ほどの赤い服を着た女性がい
きなり自分に向かってくる。

「きつさまあ、華琳様に刃向かうか！」

問答無用と幅広の剣を鉄月に振り下ろそうとする。これは覚悟の上の事である為手に持っている大剣でその一撃を防ぐ。その刃と刃のぶつかり合いを利用し、相手に衝撃波をぶつける。いつもよりも大きな衝撃だったのだがそれはさておき、僅かに隙ができた為その時に間合いを広める。

「てえええい！」

「はあっ！」

下段からさらに切りかかってくるそれをバックステップしながら弾き返す。そこで双方間を取り、仕切りなおしとなる。今にも追撃しようとして女性が襲い掛かるが、

「やめなさい！！」

「し、しかし」

「2度は無いわ、剣を納めなさい」

「か、華琳様」

「諦めろ、姉者。今のは姉者が悪い」

2人に窘められて女性は渋々剣を納めるが、あの2人は姉妹だっ

たのかと今更ながらに思う。鉄月は剣はしまうものの、剣の柄を代わりに持ち様子を伺う。それをいぶかしんで曹孟徳と先ほど名乗った女性は鉄月を一瞥すると話しかける。

「先ほどの理由を教えてください。拘束といっても別に無理に危害を加えるわけではないつもりだったのだけど、あそこまで否定されると、ね」

「なに、私は依頼主の物を預かっている。それを勝手に他の者に預けたりして万が一壊されたりしたら信用に関する。私のような者はその信用がなくなるだけで食っていけなくなるのですよ」

「貴方の命にも関るこの状況で？」

「こう言っただけですが、ただ逃げ出すくらいならできますので」

2人はしばらく無言になると、どちらからとも無く互いに笑い出した。まあ鉄月は半分虚勢で、曹孟徳は面白い獲物を見つけた猫のようなイイ笑顔でと大分違いはあるのだが。

「ふふふ、いいわ貴方の度胸に免じて拘束は無しにしてあげる。改めて来てくれるかしら？」

「ええ、それならば構いませ「但し」んが？」

「貴方のその腕や遠目で見たあの光の正体、それを教えてくれるならね？」

「まあ、特に隠すことは無い。勿論それくらいならいくらでも」

「いいわ、それなら早速城に来てもらうわ。そうね、言い忘れてたけど貴方は歩きで来なさい。余った馬など居ないから」

イイ笑顔で鉄月を見る曹孟徳。鉄月は何でこんな事にと、少々辟易しながらも騎馬達に連れられていくのであった…

2 話

あの後華琳と鉄月一行は陳留城内に入り、相当に大きな（鉄月にとつては）城…屋敷に入っていく。軽く話を聞くとそこでこの一帯の政治を取り仕切る場所でもあり、警備が一段と厳しくもなっている場所でもある。

「では早速だけど、その光の剣とどこから来たのかなど教えてくれるかしら？」

「了解。出身は…正確にはあちこちを転々と渡ってきたので具体的な場所はないが、拠点としていたのはアラド大陸、ヘンドンマイヤという町だな」

「…全く聞いたことがない場所だ。それにその響きからすると遙か西方の地域のような場所にあるのか？」

「さあ、としか。俺もここがアラド大陸から見てどの方角なのかは分からないのでなんとも」

「では先ほど光っていた剣は？」

「んー説明がうまくできないのをあらかじめ謝っておきたいんだが、これは俺の住んでいる地域の遺跡や野獣…？とも言えいいか。そいつらが稀に持っていたりするものだ」

その後も自分の腕、光の剣、今まで何をしていたかを話す。

鉄月は左腕に鎖と腕輪を2つ肩の付け根と手首、そしてさらにその腕は白く、昔鬼という異形の者に呪いをかけられ今はそれを制御しているが反動でこうなっている。

光の剣は本来は普通の者は使うと爆発してしまうものであるが、その鬼の呪いを逆にその剣に活用し扱うことができるようになった。

今までは孤児からとある爺さんに拾ってもらい、その人にその呪いを抑える方法・読み書き計算・日常生活などに必要な知識・そして生活の方法を教えてもらった。そしてその力を生かして傭兵に、その後は何でも屋のような仕事をしていた。

ここで会話をしているうちに何故名前が2つあるのかと尋ねて聞くとここでは性・名・字そして真名があると言う。名前しかない自分にとってはなんとも面倒な話だが、とりあえず曹操孟徳・曹孟徳と呼ばばいいと言われたのでその呼び名で話す。他の二人は夏侯惇（春蘭）と夏侯淵（秋蘭）と呼ばば良いそう。

それぞれを話し終わった頃には完全に日は落ちていた。

「以上が貴女に言われた事の全てです」

「なんと言っか…中々壮絶な生き方で、髪まで白くなりよほど苦労したんだろう」

ちなみに鉄月の格好は白髪ツンツン頭、上着のジャケットに黒のシャツ、青いズボンに革のベルトを二重巻き、といった軽装である。白髪なのはその通り、その時に白くなってしまったのである。

「確かに私達も苦勞はしたが、孤児になり妖術の類に侵されるとはなあ。それに嘘をついている様子もなく本当のようだし、ましてこんな嘘について自分に何の利もないだろうしな」

「ま、貴方の人生に口を出す気にはならないけどとりあえず不審な部分は理解できたわ。して、これから貴方はいったいどうするの？」

「どう、とは」

「このまま貴方：鉄月はこれからどうすごすのか、と言うことよ。元いた場所に戻ろうにも手がかりもないんでしょ？」

その通りである。それに何故かは知らないが会話は通じるものの、字が全く読めない。辛うじて一部が仲間の剣士が使っている文字に似ている為に理解はできるもののもとても不便である。まして手がかかりは0、こんな状況で右も左も分からない自分が元の場所に戻るなどあろうはずもなかった。

余談ではあるが先ほどの仲間の剣士とは阿修羅と呼ばれる盲目の剣士、自分と同じ境遇の人物が鬼の力を制御ではなくその力が暴走してしまった者である。その阿修羅が一部の技にここで使われてい

る文字を使っているようであった。

「その顔を見ると凶星のようね。それで物は相談だけど、ここで働く気はないかしら？」

「「なっ、！？」」

「…そう、だな。その要望は確かにありがたいのだが、いくつか条件があるな」

「なにかしら？」

「自分の荷物はこちらが許可しない限り没収しないこと。あと元いた場所に関する手がかりや情報を集めさせてもらうこと…ああ、これはちゃんとそちらにも報告することを前提でな？最後にもし自分が帰ることができる場合、戻ることを許可すること。これが条件だな」

予想通りの条件である。武器などはそもそも自分達には扱いが難しいので没収などする気も無く、歯向かうのであれば軍勢を出すのもやぶさかではない。情報集めはこちらがそもそも検閲できるのでそこら辺は何とでもなるだろう。最後の条件はいずれ情けと恩で雁字搦めにしてしまえば叶うことは難しいだろうと睨む。

「華琳様！このような者を配下にするのは「春蘭？」はっ！す、すみませぬ」

「確かに腕は姉上と切り結べるほどであるし、惜しい人物ではありますが」

「…分かったわ。その条件で貴方を雇うわ。よろしくね、鉄月？」

「よろしく頼む」

鉄月は半分成り行きではあるものの、曹孟徳の元に身を寄せる事になる。この後鉄月には真名は無くまして性、字も無いと判り少しばかりいざこざが起きたがそれはまた別の話である。

3話

朝になり鉄月は目を覚ます。時を計るようなものは持ち合わせてはいないが、それでも朝日が眩しいので起き上がる。

昨晩は夏侯淵にあの建物とは別の宿舎の空き部屋へ案内してもらった。申し訳ない程度の布団と敷物があるだけだが、これでもまだマシな扱いなのだろう。今は客将扱いではあるものの、一歩間違えば獄に繋がっていただろう事を考えると…正直考えたくも無い。

昨夜は他にも自分の仕事、立場、そして給金に情報の有無を聞き込んだ。それぞれ…

仕事：兵士の訓練・この国の文字の勉強他諸々。腕前は夏侯惇と戦えるだけの腕はあるので問題無いとの事

立場：世間で言う天の遣いではあるが、それは公言はしないこと。

見方を変えると国家反逆にもなりかねない為

給金：正確には不明。しかし、その都度必要な資金提供はするとの事

情報：全く無し。これは地道に世間を調べるしかないとの事

ちなみに立場の件はそのとき初めて聞かされたが、まさか自分が

そんなご立派な人間であると言われたときは少々笑ってしまった。
無論華琳達は自覚が無い！と怒っていたのだがこっちとしてはそんなもの関係ない。

今日はその初日であるのだがまずは身支度をして事前にここに来ていといわれている場所に来る。どうやらここは訓練所のようなのであるが、肝心の将達が来ていないようだ。少々落ち着かなくきよきよと見回せば、そこに夏侯惇が来たのだが夏侯淵は来ないのは恐らくは他の仕事をしているのだろう。

自分は兵士と思わしき者の近くにいたのだが、夏侯惇が手招きをしてこっちに来ていと言ってくる。ここで兵士に新たに入る将の説明と自己紹介をさせるようである。そこで簡単に自己紹介をした後訓練が始まるのかと思いきや、部隊長にその腕を見せては頂けないかと言われ急遽模擬戦となる。まあ実際いきなり将が来たからと言って素直に聞く事も無い腕自慢もいるのだろう、とは薄々感じてはいたが。

「ま、これも一種の歓迎の一環だと思ってくれ。なに、お前の腕前ならいけるだろうさ」

「熱烈な歓迎を感謝するよ。（あの剣は使わないほうがいいか？）」

「がんばりな。（勿論、アレは目立つ上に説明も面倒だからあの太剣を使え。あれくらいならうちの面子は慣れているだろうさ）」

小声で話を終えると二人はそれぞれ間合いを離しそれぞれの獲物を構える。鉄月は身の丈もある長さで刀身が厚めの剣、部隊長はこの国で使われているであろう普通の剣に盾を。

「それでは鉄月と部隊長の模擬戦をする。双方用意、始め！」

「はあっ！」

「…」

開始と同時に隊長は自分の左から袈裟切りを仕掛けてくる。それを避け軽く右に回り胴薙ぎを仕掛けるが隊長は盾を当ててその剣を防ごうとする。

「くっ！」

「甘い！」

しかしその盾を大きな音を立てて叩き割り（この類の剣は切るよりも叩き潰す、の方が正しい）、さらに体を捻り剣ごと体重を乗せた自分の一撃をその胴当てに当てると隊長は少し体が浮くと幾ばくかその後ろに飛ばされ立ち上がらなくなる。どうやら気絶してしまったようでそのまま起き上がらなくなる。

「そこまで！鉄月の勝ちとする！」

これで終わってしまったのに少々拍子抜けてしまいやれやれと心の中で呟く。しかしこれは仕方の無いことで鉄月は単独で森の精霊や獰猛な獣、果ては不気味な教団の殲滅や超能力者などを倒している。ましてそれが兵士の隊長程度であればさほど苦勞はしないのは当然のことであろう。

「おいおい、今回来た武将は盾をぶち破ってそのまま相手を吹っ飛ばしたぞ！」

「夏侯惇様は毎回ここに大穴を作る位だからそれに比べりやましだろーが？」

「そつえばよく俺達あんな一撃を受けて平気だよな……」

途中で聞こえたセリフに少しばかり心当たりが合ったがなるほど、昨日あの一撃を受け止めて衝撃波をぶつけようとしたときいつもより大きかったのはそのせいだったのかと一人納得する。というかあの細腕で大穴を空ける一撃……何か間違ってる気がするのは気のせいと思いたい。

その後はその隊長を除く全員で訓練・演習を行う。鉄月にとって集団戦と言うのは初めてで今までは精々数人对大勢が大半であり、むしろ自分は単独で多くの戦いをこなしていただけに戸惑いを覚えながらも何とかついて行きようやく流れを知る頃には太陽が傾いてきた頃であった。

「どうだ集団戦、兵士を使って戦って見る感想は？」

「難しい、の一言だな。経験が無いのもそうだがやはり兵を自分の手足のように操る、そして少しの人の崩れができるだけで流れががらっと変わってしまう。…責任が重いもんだな、武將ってのは」

「私は華琳様に戦場を教えていただいた時もそんなものだったよ。それでも私は難しいことは苦手だ。なら、役目を頂いた事くらいはしっかりと役目を果たすだけさ」

事前に曹孟徳から将とは何ぞやと簡単に聞いているが、いきなり将らしくない発言である。しかしこの人はこれで戦場をつまく渡り合っているんだろう、と思うとそれはそれで凄いと思う。

その後は軽く訓練所を片付けて少し遅い昼食となる。初めての集団生活でのご飯になるがこれが中々うまい。^{ダンジョン}戦場に行く前は酒場でそれなりのものを食べるが、いつもは干し肉や木の実にひどいときは体が力ツカとくる酒だけのときもあったので殊更であった。

訓練↓昼食と来ると次は文字の勉強。何とか文字一文字の意味は分かるのだが幾つか繋がるともう分からなく、想像を絶する難しさだった。しかしこれを覚えないとここでは不便である為に何度も砂の上に書き取りをしては消しての繰り返しで少しずつ覚えているようである。

こんな日々を1週間ほど続けたが、特に自分が天の遣いと思われ
たりすることも無く忙しい日々が続く。時に夏侯惇に模擬戦を挑ま
れたり（その時は互いに決め手が無くそのまま引き分け）、夏侯淵
に苦情を言いに行ったら逆に暴走を止めるのをお願いされたり（そ
の割に顔はニコニコしていたが）、曹孟徳には職務について見識を
求めたら逆にその見識を買われ（何でも屋の仕事で算術ができる為）
一部の文官の仕事を回される羽目になったりと少しばかり憂鬱にな
ったが…。

ある日、新たに人材が軍に入るとの事でどのような人物かを見に
行くと、そこには動物の耳のような物が付いている被り物をして仕
事の報告？を行っていた少女がいた。この長が女性なのでそこま
で違和感も無いがやはりまだ年端も行かない子が、と思うのは仕方
が無いことであるだろう。その少女が自分に来るのに気付くと殺気
だった目でこちらを睨んでくる。

「華琳様！この汚らわしい男は何故ここにいますか！」

いきなりの言われようで、鉄月は心の中で頭を抱えてまた厄介ご
とかと一人溜息を吐く。まだまだ鉄月は厄介ごとが付きまとうよう
だ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0528v/>

恋姫無双・光の剣を持つ者

2011年10月8日11時11分発行